

# 当院のCT造影検査における副作用発生件数の報告

八戸市立市民病院 放射線科 ○吉田 雅貴 (Yoshida Masataka)

石倉 牧人 下沢 恵太 大槻 真也 川本 勇一

## 【はじめに】

CT造影検査によって患者の各臓器の機能的な情報が得られるようになったほか、また造影剤による濃度差を付けることができるようになったため、個々の組織の診断にも有用的な検査である。しかし、造影剤投与によって副作用が発生することがある。そこで当院のCT造影検査において副作用がどのくらい発生しているのか調査し報告することとした。

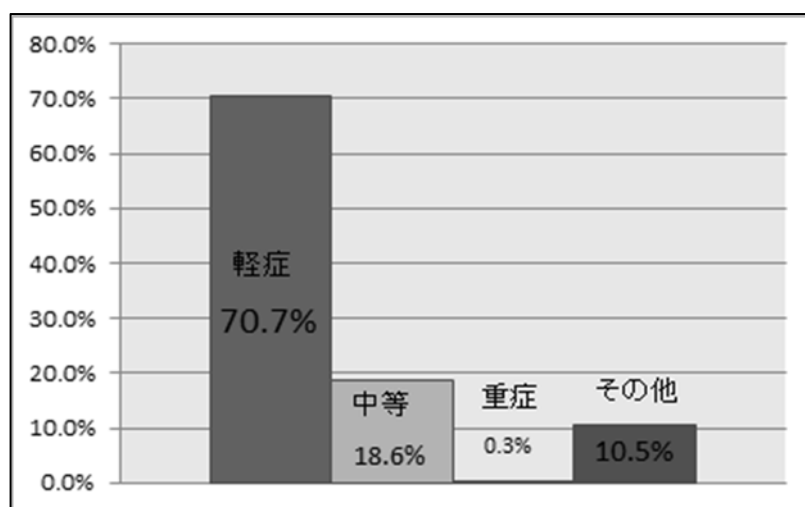
## 【方法】

患者について、8時15分～17時においてCT造影検査を施行した患者について調査した。集計期間は平成25年1月～平成27年7月までの1年9か月間で、症例ごと、重症度別に分けて集計を行った。

## 【結果】

集計期間内で造影を行った患者数は16,670人で、そのうち副作用があった患者は203人で、発症率は1.22%となった。特に2月、5月それに7月に副作用を発症した人が多かった。重症度別に見ると、発症した203人のうち軽症が70.7%、中等症が18.6%、重症が0.3%、その他が10.5%となった。

副作用のうち多く見られた症状で、軽症で多かったのは嘔気・くしゃみ・嘔吐・掻痒感・発疹であった。中等症では動悸・呼吸苦・血圧上昇であった。重症については意識消失が1例あった。



## 【考察】

副作用が最も多く見られた時期で2月、5月、7月に多く見られた要因として考えられるのは、乾燥や脱水症状によるもの、花粉症といったアレルギー症などが関係しているのではないかと考える。また他調査による文献では、経静脈投与された場合の副作用の発現率は全体で3.13%、重篤な副作用の発現率は0.004～0.04%との報告がある。これを当院と比較すると全体で1.22%、重篤な副作用の発現率は0.006%となり平均的に推移しているものと思われる。

## 【まとめ】

今回の調査において、当院のCT造影検査における副作用の発生状況を把握することができた。今後もこの調査を継続していくとともに、アレルギーや感染症の有無といった患者の状況も合わせて調査していきたい。

## 【参考文献・図書】

1) ちょっと役立つ造影検査に関する話題 CT編 P71